

県北 どらくろあ

第104号 2024年11月1日（毎月1日発行）

文学紀行

「倉田百三のゆかりの場所を歩く」

馬込文士村（多磨霊園）

10月10日木曜日午前7時、車で庄原の自宅を出た。大学時代の遊び仲間の旅行に参加するためだが、訪問しておきたい場所があった。それで、2日ほど前に上京することにした。

20分程で、三次東インターチェンジより高速の松江自動車道路に入る。島根県の三刀屋インター

チェンジまでが無料区間で、料金の所をゲートを通過、宍道（しんじ）インターチェンジまでの高速料金が500円、わたしの愛車は軽バンのなので430円だ。三次東ー宍道の距離は73・2km、走行時間は1時間10分ほど。宍道インターチェンジを出てから10分弱で出雲縁結び空港に到着。自宅を出てか

ら1時間40分弱だ。

広島県民としては、広島空港を選ばなかったことに対して後ろめたさはあるが、出雲空港を選択した理由がある。一つはアクセスのわかり易さ。高速道路で空港近くまで行けるので、時間の計算ができるし快適である。もう一つは、出雲空港の駐車場は無料。ただし、東京までの運賃は広島空港の方が安く、日本航空がメインの出雲に比べて広島は全日空もあるので、選べる便数も多い。早期予約の割引料金を調べて、自分に合ったルートを選ぶ必要がある。

「馬込文士村」と呼ぶようになった。石坂洋次郎、稲垣足穂、川端康成、北原白秋、室生犀星、山本有三等々、文豪たちの中に庄原生まれの倉田百三がいる。まず、駅の東口に出て、安田病院を探す。倉田の主治医が院長をしていた病院だ。しかし、所在地は工事中で新しい建物を建設中だった。近くのドラッグストアで確認すると、安田病院は近くの商店街に移転して、名前も変わっているという。

9時15分発の羽田行きに搭乗して、雲上人となる。以前は“身辺整理”をしてから飛行機に乗ったものだが、いつの間にか緊張感は薄れてしまった。それでも、緊急時のビデオはしっかりと記憶&チェックする。雲の雪原から覗く“海底”の日本列島の景観は壮大だが、着陸時の急激な気圧上昇による耳痛に対処法はないものか。10時30分の予定に少し遅れて羽田に到着した。

駅に戻って西口に出て、鉄道沿いの池上通りを蒲田方面に向かって歩いた。小さな商店が並んでいて、看板を見ているだけでも楽しい。環七通りにぶつかる交差点を渡って、環七通りを右にしばらく進むと、「安田眼科」の広告看板がある。指示に従って住宅街の中心を少し歩くと、安田眼科が見つかった。倉田百三の家があった場所である。安田病院の院長が買い取って、親族が眼科医院を開業したのだと思われる。解説板が設置されている。



羽田から京浜急行に乗って品川で下車。京浜東北線に乗り換えて、JR大森駅で改札を出た。駅の西側の地域、大田区山王、馬込、中央一帯は、大正末期から昭和初期にかけて、多くの文士、芸術家が関東大震災後に移り住み、交流を深めていた。いつしかこの辺りを

「倉田百三の家は、南馬込の谷中通り近くにあり、大正十四年に越してきて以来、生涯この家で暮らしました。書齋に使っていた洋館の前が藤棚になっていて、庭の前には蓮池があり、また近くの傍らには洗い場があって、付近で採



れた野菜などを洗う光景がみられました。」

芸術家たちを惹きつけた、往時の長閑（のどか）な馬込村の風景と、異彩を放つ洋館の姿が浮かんでくる。昭和18（1943）年2月12日、この地で倉田百三は52歳の生涯を終えた。

翌朝、宿泊先の小金井市のアパートを後にした。JR中央線東小金井駅まで出て、南口の富士見通りを新宿方面に進む。5分程で真言宗の妙智院太陽寺がある。倉田百三の子息である倉田地三氏の葬儀が行われた寺院。さらに歩くと、西武多摩川線の踏切がある。その踏切を渡った住宅街に、かつては地三氏の自宅があった。

青木笙子さんの「築地人形」で、その倉田家を訪れたときのこと、書かれています。「浅見淵が訪れた倉田家を、わたしは平成三十一（二〇一九）年三月二十二日に訪ねた。東小金井駅から徒歩十分新築の家とマンションの立ち並ぶ美しい街であった。（改行）表札は倉田地三。地三さんの妻芳江さんが、息子さんと住んでいらつしやる。」

地三氏は倉田家墓所の墓誌によると、平成17年11月16日に88歳で死亡。義父であった俳優の薄田研二（本名・高山徳右衛門）の影響を受けて、舞台俳優として活躍、テレビドラマや映画にも出演している。

庄原市の田園文化センター「倉田百三文学館」のパンフレットに、「復員した長男地三は、父の残した多数の書籍を元に自宅に古本屋を開きました。その裏座敷には武者小路実篤をはじめ多くの文士たちが集まり、いつの日にか「倉田記念館」を設けようと計画し、その看板を実篤が書きました。」とある。その看板が倉田百三文学館に展示してある。自宅とは大森の家だろう。地三氏は、わたし（赤川）の先輩（古本屋）だったのである。

青木さんがインタビューした芳江さんも、墓誌によると令和4年1月6日に96歳で亡くなっている。この小金井にある倉田家の広い庭の離れ（今は二階建てのアパートになっているらしい）に、かつては地三氏の母親の晴子さんも暮らしていた。該当する住所の家はもろろん、近辺の家の表札を見て廻ったが、「倉田」の名前を見つけないことはできなかった。

線路に並行する道がなく、住宅街の中をジクザクしながら歩いて行くと、西武多摩川線の新小金井駅がある。電車に乗って次の多摩駅で下車。歩いて7分程で、多磨霊園の表門に到着する。多磨霊園は日本初の公園墓地で、面積は都立霊園としては最大の128ヘクタール、東京ドーム27個分に相当する。

管理事務所で「著名人お墓めぐりMAP・作家編」のパンフレットをもらう。石坂洋次郎、菊池寛、田山花袋、向田邦子、堀辰雄、江戸川乱歩、大岡昇平、有島武郎、中島敦の墓が、作家のプロフィールと共に紹介されている。残念ながら、倉田百三は入っていない。

倉田家の墓所の場所は「23区1種26側2番」正門とは反対側の裏門（小金井門）の方にある。概ね園内道路に面した部分が一種、それ以外が二種となるらしい。墓標の並びをそれぞれ「側」とし、墓標のひとつを「番」として区別する。好きな作家の墓参りをしながら、倉田家の墓に向かいたいところだが、腰痛悪化で杖に頼る足腰はすでに限界で、寄り道している余裕はない。ただ一人、中島敦の墓前に参拝、両手を合わせた。

倉田百三と親交のあった評論家で、倉田百三に関する評伝も書いている亀井勝一郎の墓所「20区1種22側13番」を探したが、見つけないことができなかった。墓石が撤去された場所がいくつかあったので、すでに墓じまいしてしまったのだろう。霊園内のあちこちに、こうした「空地」が散見できる。墓地の継承は、大都會でも深刻である。

ようやく、倉田家の墓所にたどり着いた。墓石が3基並んでいる。真ん中が倉田百三之墓、戒名が「威威院釋西行水樂居士」。分骨されて庄原市の倉田家墓所にも百三の墓がある。その右が「倉田家之墓」、左の「ママ之墓」が百三の前妻で地三氏の母親である神田晴子の墓。側面の戒名の最初の2字が読み取れない。「〇〇院釋尼芳絹信女」、そして俗名が「高山晴子」と刻まれている。墓誌の石碑には「神田はる子昭和四十一年八月六日歿七十六才」とある。こうした名前前の違いが、彼女の数奇な運命を暗示している。

墓所の入り口に、自然石を加工したと思われる碑（いしづみ）が立っている。浅学で草書体の文字が読み取れず、青木笙子著の「築地人形」の記載をそのまま引用させていただく。「筆をれていのち絶えなむ時さへや何をかいはむすめらみことに

百三 「おゝ亡びるものは亡びよ崩れるものはくずれよそして運命にこぼたれぬ確かなものだけ残ってくれわれはそれをしかと抱きしめて墓場へ行きたいのじゃ 出家とその弟子親鸞の言葉より

百三 倉田家の墓所はきれいに掃除されていて、墓前には美しい花が供えられていた。



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「戦中派天才老人・山田風太郎」

関川夏央 著 マガジンハウス

「アルコールの抜ける日はないから、これではアルツハイマーではなくアル中ハイマーだ」「ぼくは子供の頃から列外だった。青年になっても列外。今も列外」「少年時代以来（酒は）うまいと思ったことは一度もない。酔うのがいいんだ」

山田風太郎の元に通うこと1年半。博覧強記の偏屈老人から名言&迷言を引き出した。しかし「(君は)よく家にくるけど、いったい何をしている人なの?」と名前も仕事も理解してもらえていない。世間に対する興味が薄いのだ。「やはり才能がないことかな。それがいちばんのコンプレックスだった」。乱歩や漱石、谷崎潤一郎、見てきた作家が凄すぎる。



「般若心経」を読む

水上勉 著 PHP文庫

水上勉さんは仏門に入っていた人だ。9歳で口減らしのために寺の小僧に出された。父親は福井県の寒村の棺職人で「穴掘りさん」と呼ばれ、村の死人を埋める仕事をしていた。長じて寺を飛び出した水上さんは、世俗にまみれて暮らしてきた。

「色即是空」、目に見えるものは刻々変化して実体のないものである——。人生は花も実もあり、苦悩も多く、色即是空など絵空事だと反発する。正眼国師や一休禅師の高説を精読して理解しようとするのだが、「般若心経ほど、今日の出家僧のこっけいさに気づかせる経はない気がした」と匙を投げる。仏の掌の孫悟空を演じて見せたような気もする。



「山賊ダイアリー」

岡本健太郎 著 講談社

リアル猟師奮闘記の副題。岡山県の片田舎で生まれた作者は、近所の猟師のおじいちゃん仲間と仲が良く、動植物の知識や罠の作り方、魚の獲り方などを教えてもらう。おじいちゃんに憧れて、猟銃・空気銃所持許可証の交付を受け、猟師となる。

シカやウサギの糞は新しいものなら食べられる、セルロースやビタミンが豊富。最初から目から鱗。空気を圧縮して弾丸を撃つ空気銃のシステムや、キジバトが狩猟できる野鳥でけっこう美味しいこと、野犬は野良犬と違い狩猟対象等々、漫画でわかりやすく解説してくれる。獲物の処理方法、料理法も紹介されていて、おいしそうだ。全7巻。



どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣（店内専用通貨）であれば半額、現金であれば3割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

特別寄稿

とおうしめたくせいしよ

『杜翁手澤聖書』物語

トルストイが聖書を送った日本人

倉田百三友の会会長松園真

トルストイが聖書を送った日本人

『戦争と平和』や『アンナ・カレーニナ』などで知られるロシアの文豪レフ・トルストイが、親交のあった日本人に愛用の聖書を贈ったこと、そしてその聖書が、四十数年にわたって庄原の地で秘蔵されていたことをご存じでしょうか。

この聖書は、トルストイが徳富蘇峰に託して小西増太郎に贈ったものです。小西増太郎は、ロシア留学中の1892（明治25）年にトルストイと初めて会い『老子道徳経』の共訳作業を始めます。これが生涯にわたる二人の親交のきっかけとなりました。トルストイが最初に出会い最も親しかった日本人といわれ、トルストイの葬儀に参列した唯一の日本人でした。

1896（明治29）年、トルストイから小西増太郎に一通の手紙が届きました。手紙には、「小西君、君が紹介された徳富という方が当ヤース

ナヤを訪問し、愉快に面談した。同氏に託して四福音書一冊を君に送った。同書中で重要だと思ふ節々には朱線を引いておいた。まずこの節々を学び、それで根本思想をつくつたのち、青線を引いた節々をお読みなさい。そしてどんな線も引いていないところは大切でないから学ぶに及ばない。」と書かれていました。

徳富蘇峰から小西増太郎に手渡された聖書は、ロシア教会の官版四福音書で322頁、縦13センチ、幅7センチの小さなものでした。後に柩桐の箱が詔われ、徳富蘇峰に箱書きが依頼されたのは1923（大正12）年4月のことでした。蘇峰の直筆で箱の蓋には「杜翁手澤聖書」（トルストイ愛用の聖書）とあり、蓋の裏面にはこの福音書の由来が漢文で記されています。

聖書は小西弓次郎の手に、そして庄原の地へ

トルストイと小西増大部をテーマにドキュメンタリー番組を企画していた小波誠生氏（元日経新聞社記者・文筆業）は、1989（平成元）年の秋、その取材のために、庄原に住む小西増太郎の次男小西弓次郎を訪ねました。そこで、弓次郎から「こんなものがあるんです」とロシア語の聖書を見せられました。

驚いた小波氏が「小西得郎氏（小西増太郎の長男・プロ野球界で活躍）の話によれば、その聖書は1939（昭和14）年に増太郎氏が亡くなられた時、石棺に亡骸とともに収められたことになっていますが？」と尋ねたところ、弓次郎は、「石棺の中に入れたのは父が愛用していた聖書です。トルストイの聖書は、私が袋に入れて首から下げて肌身離さず持ち歩いていました」とこともなげに答えられたそうです。

小西弓次郎は、父増太郎が三度に亘って奉職した岡山県児島郡味野村（現倉敷市児島味野）の塩田王、野崎家で生まれ、「弓次郎」は当主の野崎武吉郎が名付けました。雅楽を学び、一燈園に入園した時期もありました。文学を志し倉田百三の内弟子となつて百三宅に入ります。1926（大正15）年

に創刊した雑誌『生活者』に弓次郎の作品が幾度も掲載されました。百三と同居生活をしていた妹倉田艶子も、同じ時期に面足千木（おもたるちぎ）の筆名で同誌に作品を発表していました。そうした縁からか、弓次郎は倉田艶子と結婚します。『青草人』（倉田艶子著）の巻末「倉田艶子小伝」によれば1932（昭和7）年のことです。弓次郎の甥吉橋泰男氏は、「二人の結婚は1940（昭和15）年と聞いている」と語られています。

いずれにせよ小西夫妻は、敗戦の色濃い1945（昭和20）年7月、疎開先の千葉県から艶子の郷里である庄原に「杜翁手澤聖書」とともに移り住みました。戦争が終わつたら東京へ戻るつもりだったようですが、そのまま住み続け庄原が二人の終焉の地となりました。

仕事を持たず気ままな庄原での生活でしたが、生活費はどうされていたのか疑問が残ります。吉橋泰男氏は「東京に弓次郎に権利の有る土地か建物があつてその地代か家賃が庄原へ送金されていたのかも知れない」と推察されています。実際、晩年の弓次郎氏に東京の土地が売れて相当のお金が入ってきたことが当時

の関係者の間で話題になりました。1989（平成元）年、そのお金で弓次郎は、妻艶子の著作を『青草人』、『兄百三』の二冊の本にまとめ、自費出版しました。

弓次郎は、1991（平成3）年4月、倉敷市児島味野の野崎家、野崎泰彦氏（財団法人竜王会館理事長）らの訪問を受け、翌5月には倉田家の親戚筋にあたる瀬藤晃弘・秀子夫妻の付添いのもと野崎家を訪問されます。82年振りとなる野崎家訪問は、『杜翁手澤聖書』を当家に寄贈するためのものでした。



桐箱の蓋裏。徳富蘇峰直筆によるこの聖書の由来文（漢文）も忠実に復刻されている

弓次郎が妻艶子とともに1945（昭和20）年7月に庄原に移り住んでから、この時まで『杜翁手澤聖書』は実に46年もの間、庄原の地にあつて弓次郎に守られ続けていたことになりました。人生最後の大仕事をやりとげて安心されたのか同年10月、弓次郎は百三が愛した上野池にほど近い借家で92年の生涯を閉じられました。

庄原での地で『杜翁手澤聖書』を手にした人

大学2年生の定光大燈氏（浄土真

宗西楽寺前住職）が渡辺家の二階に暮らす小西弓次郎・艶子夫妻を初めて訪ねたのは、病気の父に代わってお盆参りをされた昭和45年の8月の事です。艶子の実家倉田家は浄土真宗勝光寺の門徒でしたが、大燈氏の父は個人的に親しくされていた小西夫妻宅へ、お彼岸やお盆には欠かさずお参りされていたそうです。

1988（昭和63）年4月の艶子の葬儀では勝光寺住職が導師、その後西楽寺住職となっていた大燈氏が副導師を務められました。一人暮らしになられた弓次郎が渡辺家から

程近い借家に移られたのを機に、晩年の弓次郎の身の回りの世話をされていた瀬藤秀子さんの依頼もあつて、大燈氏はそれから約1年間、2カ月に一度くらいのパースで弓次郎を訪ね話し相手になられていました。大燈氏の回想です。

「一番記憶に残っているのは、トルストイから弓次郎さんのお父さんの小西増太郎に贈られたという聖書を持っておられて、それを見せて頂いたことです。掌の上に載るほどの小さい本で、確かロシア語の聖書であつて、中に色々線が引かれていた記憶があります。興味深く見ていた私に、突然「西楽寺さん、その聖書を持って帰って保管してくださいませんか」と弓次郎さんが言われました。」

「その本の文化的価値も、小西増太郎という人のこともよくわからず、寺に聖書は必要ないと思ひ、その場で丁寧にお断りしました。「でもあのときいただいっておけば良かった」とも思いました。」

1991（平成3）年10月の弓次郎の葬儀では、艶子の時と同様、勝光寺住職が導師、大燈氏は副導師を務められました。二人の出会いから21年の時が流れていました。

『杜翁手澤聖書』復刻版の発行へ

小波誠生氏は、“世界的に貴重なトルストイ研究資料”と言えるこの聖書を後世に残すため、弓次郎氏の快諾を得て復刻版の発行に踏み切られました。

1991（平成3）年4月、西田書店（東京都千代田区神田神保町）から、『杜翁手澤聖書』と墨書された柁桐箱入り限定百八部が発売されました。手の込んだ作りと発行部数の少なさから価格は一部49万5千円（税込）と高額なものとなっています。

時を経て、2024（令和6）年5月、小波氏とともにドキュメンタリー番組制作に企画されていた山中敏治氏（元テレビ新広島報道スポーツ局長）から、柁桐箱入りの復刻版1部（108部の十四）が倉田百三文学館に寄贈されました。

1896（明治29）年にトルストイから小西増太郎に贈られた聖書は、倉田百三の内弟子にして百三の妹艶子を妻とした小西弓次郎の手に渡り、1991（平成3）年に野崎家（後に国重要文化財「旧野崎家住宅」に指定）を終の棲家としました。同年に精巧な復刻版が発行され、その1部が2024（令和6）年5月、庄原市の倉田百三文学館に寄贈されま

した。明治から大正、昭和、平成を経て令和へ、実に128年に亘る『杜翁手澤聖書』の物語です。

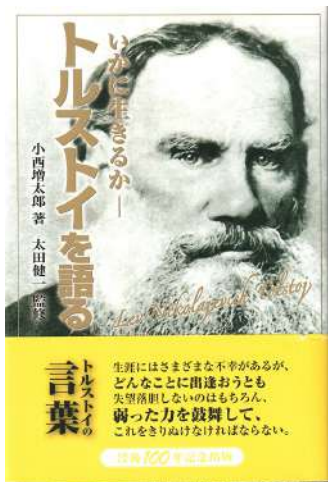
〈参考文献〉

『兵は不詳の器にして君子の器にあらざり』平和主義の原点「杜翁手澤聖書」小波誠生著（1991年、西田書店）
杜翁手澤聖書付録「老師トルストイからの福音書」

『小西増太郎覚書―杜翁から愛用の聖書を贈られた日本人―』太田健一著（1992年、『倉敷の歴史―倉敷市史紀要』第二号）

『いかに生きるか―トルストイを語る』小西増太郎著・太田健一監修（2010年、万葉舎）

『小西弓次郎さんとトルストイの聖書』定光大燈著（2024年、手記）



寄稿エッセイ

「言の葉（追記）」

高柴順紀（菊栽培農家）

先の「言の葉」はいつの間にか荒神神楽の中に消えてしまった。そのまま続けて地元の比婆荒神神楽への思いを書きたいと思います。

広島県内はもちろん庄原市内の神楽については多くの研究者によって明らかにされつつありますが、その奥深さに驚きます。しかし神楽を楽しんでる私にとって昔はどうであったのか気になるところです。

今のところ一番古くて分かりやすいのは菅茶山の荒神神楽に関する一文ではないかと思っています。福山領内の民俗行事を幕府に報告した『備後国福山領風俗問状答』の十月の項に当時の荒神神楽が書かれているのです。問状答は福山領内の事とはいえ神石高原町も含まれているので、比婆荒神神楽の分布域と重なりますが、茶山の簡潔な文章（太字の部分）に添えられている墨で書かれた挿絵は当時の姿を彷彿させてくれます。

以下、問状答と東城の神楽を比較してみたい。次の文章から始まって

います。

荒神舞と言うことがある。即ち里神楽で、荒神神楽ともいう…名については…小さな祠があるが、それは各組々に氏子があり…六年か七年に一度荒神神楽を奉納する…そして神楽を行うために前もって野原に仮の高い家らしき物を作り…これを高殿といつて注連を四方に引き、棚を構え、掛布・掛鳥・神酒・鏡餅・燈明などなどを供え、神殿の真ん中に「造化」と言うものを吊るし…とあるが、かつて神殿は野外であったと聞いているが、今は民家の大当屋の中に作られ、造化は写真のような物で白蓋（びゃっかい）と言います。

最初に、当番という家に神職の人が集まり…古式の大神楽は四昼夜でしたが、今は二昼夜なので初日の午後から始まります。まず当番に相当する小当屋を清める湯立をし、祠からご神体を迎えて神事となりますが、問状答には記されていない名内各戸ごとの吉凶を占う「土公神（ロック

ウ)遊び」が行われます。

小当屋での行事が終わるとこれより「高殿入り」と言つて：仮屋へと向かうとありますが、初日の夜、民家である大当屋へ「神殿移り」します。そこでの神事を問状答では十二番として詳しく述べ、甚だ古く優雅に見える、とかすこぶる内侍所の御神樂の声に似ているので、歌には新古があるけれども声調は古いものと見受けられるとしている。一方東城では七座神事と言いますが印象的なのは四人の神官で舞う「神迎え」で、片

田舎とはいえ印象的な荘厳な舞だと感じます。

七座が終わると祝詞(のりと)神事が始まります。同時に白蓋引きが行われ、ロープで操作するのですが天井から大きく揺れ動く白蓋は神事の中でも派手やかな一瞬です。茶山もかの造化という物を、引き上げ引き下ろし、と触れているので当時も同じ事をしていたと思われます。次に素晴らしい挿絵をつけた剣舞が出ていますが残念ながら東城には残っていません。しかし森中島家文書の

江戸時代の資料には出ており、茶山の挿絵で想像するしかありません。

この後やっと皆が待つ「国譲り」などの楽しい能舞が始まり明け方近くまで続きます。終わると茶山が「王子をせし」としている「五行祭」をさつと済ませ、大神樂の顔ともいえる藁の竜(たつ)を登場させます。

又、山里の神樂に、大蛇を藁で作り、胴回り一尺五寸ばかり、長さ三間余りで、頭に耳をつけ、あの神殿の良(うしとら)の隅に置き、神職二、三人が何者かと問い咎めると：これは東

城では「竜押し」と称して

野外の田の中で竜と神官が注連縄の内と外で対峙し、荒神神樂の宗教儀とも考えられる問答をします。そして入ることを許された竜は国の中で暴れ、神官を巻いた時点で終了します。

次に竜は神殿の中に吊るされ、「荒神収め」(託舞)が始まるのです。

この神事に臨む神官(神柱)は数日前から潔斎し、竜の前や後ろで白布を肩にかけて舞い、やがて神がかりとなります。軸幣

の竹串を割ったりしながら暴れ、過去には皆に託宣したと伝えられます。ですが今は別の形となっています。写真で命がけの大神樂のクライマックスである雰囲気想像してください。

さて、竜は三年後の御戸開き神樂があるまで祠のそばの大木に巻かれ朽ちるのです。鱗を落とされてまきに成仏を果たし、祖霊になった姿だと言ふのだが：

茶山も刀で頭の毛を切り、体を三廻りの輪にし、尾と頭を一所にして、祠の下におくこともあるとしているが、神がかりのことは全く書いていないのです。実際はどうであったのだろうか。

菅茶山は私にとっては別世界の人ではあるが、神樂で会えるとは。これも「言の葉」のおかげと思つている。

〈引用文献〉

「備後国福山領風俗問状答」(菅茶山顕彰会、現代文)



東城町栗田・小室名大神樂(平成16年)の白蓋のシーン



東城町竹森・岡田名大神事(昭和54年)の託舞のシーン。かつては大神樂を大神事といっていた

文学探訪

人生探訪の徒、倉田百三の流転⑧

晩年は「困窮」との闘いだっただとは

音谷健郎

倉田百三は、肋骨カリエスという不治の病と闘いながらも、多くの著作を出しつつ、悠然と老境を送っていたと思ひ込んでいました。だが、その人生をたどると、晩年期には、「困窮」に悩まされていたようです。でも、

平然と振る舞い、作品でも精神的、哲学的な思索、もしくは言い回しに徹し、生活苦を訴えた文章には、出会いませんでした。

百三の生の声を知ることが出来るのは、書簡からです。東京方面で療

養していた時期の昭和11年3月、「生長の家」を起こしてほごない谷口雅春氏に、次のような借金のお礼の書簡を送っています。45歳のころです。2・26事件のすぐ後です。

「小生の無理なる依頼をも御承引下さって早速五百円お送り下され確かに拝借致しました。小生これまで援助し来たりたる人さへ冷淡なるに面識浅き貴兄より早速の御厚情を受け深く感謝致します。お蔭にて窮境を脱しました」というものです。同時に、借金のカタにと名画を差し出していきます。

事缺く有様故。つくづくこれまでの贅沢を悔い、放漫生活を恥ぢてゐます」と、連綿と書き綴っています(同)。これより6年前の大作の論集『絶対的生活上下』では「生活音信」に困窮についての次のような一節があります。

「何と云つても貧のどん底に居た事がないと云ふことが自分の人生の理解の深さを妨げて居るといふことは免れない。自分は本心に従ふ以上好んで貧のどん底には落ちられないが、自分が自殺さへしなかつたら、さうなることは疑ひない。その時にはもつともつと人生の真実を知る事が出来るだらう。素より絶対的生活はどんな境遇にあつても生きることが出来る。併し不幸な者や、病者や、貧乏人は色々な快樂でまぎらす事なく、純粹に、生きることそのことの意味だけで生きねばならないから、その絶対性をはつきりと見えるわけだ」



晩年の百三



広島市東区、岩崎病院の玄関には「青春は短い。宝石の如くにしてそれを惜しめ」と、百三の言葉が刻まれた碑文がある(左下)。百三に私淑していた理事長が庄原の出身だった

「一、ルドン夫人・ルドン作(オリジナル、五百円にて買ひしもの)」

一、寺子屋・岸田劉生作(三百円にて買ひしもの)」

窮状と同時に、百三の義理堅さを想像させます。(西田寿吉著「倉田百三への旅」より)

これから5ヶ月後の8月には、岩波書店社長の岩波茂雄氏に養女和枝(姉の遺児)の結婚費用に困っているとして援助を依頼しています。

「今日は月々の生計にも

同時に、題名の「絶対的生活」についても、少し分かるような気がします。

ちなみにこの「生活音信」は、百三が精魂を傾けた個人誌「生活者」に連載したコラムを集めたものです。精魂を傾けていたその「生活者」は、

◆晩年の百三の行動と著作活動◆

- 昭和 5年(40歳)
5月 戯曲集「恥以上」刊行
9月 論集「絶対的生活」(上下)
6年 4月 成田山新勝寺で37日の断食水行
8月「冬鶯」刊行
7年 7月「倉田百三歌集」(430首)
10月 野火止平林寺で参禅
12月「生活と一枚の宗教」
8年 赤松克麿、津久井龍雄らと国民協会結成
9年 6月 論集「大乘精神の政治的展開」
9月「法然と親鸞の信仰」
10年 3月 長編小説「法の娘」
11年 5月「生きんとての会」結成
12年 10月「大地にしく乳房」
13年 2月 論集「祖国への愛と認識」
12月 書簡集「青春の息の痕」
14年 3月 日本主義文化同盟に加入
5月「生きんとての会」を設立
10月～12月 中国大陸に遊ぶ
(4年～14年は寛解で、普通の人並みに生活)
15年 2月 大陸の疲れで、大森の自宅にて病臥
12月 自伝的小説「光り合ういのち」
18年 2月 大森の自宅にて永眠、52歳

発行に伴う借金が貯まってすでに昭和4年に廃刊しています。同年は11月に米国から始まった世界恐慌の年でもありました。

しかし一方で、昭和14年、青年たちに呼びかけ「生きんとての会」を結成・主宰し、死の直前まで毎月1、2回集まっています。自著の輪読研究などして、啓発と友好をはかっていました。「家庭では嬰兒の様な所があった父が、会場では太腹な指導者として種々な問題をてきぱきと処理

して堂々たるものだった」とは、長男地三の言葉です。地三は、「昭和14年当時、単行本は売れ行きが落ち、生活は苦しかった」とも回想しています。病床の最晩年は淋しく、亡くなる2日前に百三の病床を見舞ったという養女和枝の夫、朝谷耿三(こうぞう)は書いています。

まず、手術痕の痛々しさ。「胸部は幾度もの手術で表面の半分は切り開かれ、老いた河魚に似た皮膚が幸う

じて一端を体につけ、手当をする度に医師は蓋の用をなすその肉塊を展るげ、胸一ぱいに咲く牡丹の花に、オキシフルを注ぎ、黄色い花蕊(かずい)を削り、無惨にも萼(がく)の奥まで、ヨードフォルムのガーゼをピンセットで長々と差し込むのであった」と。

私は「百三は何度も手術した」と、他人事として書いて来たのですが、その現実には身震いするような展開です。朝谷さんは、さらに続けて、「毎

日は手当を、しっとり額に汗をにじませて先生(百三のこと)はそれに堪へてゐた。熱が高まり震えが襲ふても先生は傍に居る者の手を両掌でしっかりと握り、頭(こうべ)を下げ、歯を食いしばって、痛い、苦しいとは未だ一言も言った事はなかった」と。百三の超人的な一面を見る思いです。

そして、百三の孤独を見つめて、「五十三歳の男盛りと云ふのであるが、永の患ひで、すっかり衰へ、友人つきあひも少なく、それに急激な思想の変化で、つき合ふ人々も日々異にし、打ちとけて語る友人は少なかったやうに思はれた。思想も何も越えた真の友情にすがりたいが死一步前の淋しい孤独感がひしひしと迫ってゐた」と書いています。(以上は「百三選集別巻」より)

何と痛ましい、何と我慢の人であったことか。

名家倉田家のお坊ちゃんとしてスタートした百三だが、失恋と家の破産、長い闘病生活という試練に見舞われ、ひるみながらも真正面から引き受け、文学者のみならず、宗教者としてもすくくと立っている。そんな像が浮き上がってきます。

ハロー注意報⑪

——進駐軍がいた町のはなし

面白いおじさん達

松岡初枝

私の家は商店街にあり、入間川駅（現・狭山市）から歩いて五、六分の立地なので、町には多くの人達が行き交っていた。お茶屋、八百屋、肉屋、魚屋、パン屋に文具屋、医院、まだ

い物カゴを持った人が出歩く。遠方からバスで来る人もいた。そんな商店街に畳屋や染め物屋の職人のおじさん達の作業場もあった。

我が家の美容室の筋向かいが畳屋で、親方と数人の職人さんが畳を作っていたが、私はその作業を見るのが好きだった。秋、沢山の稲藁が農家から届き、作業場の奥の広い所に置かれた藁で畳床を作る。その上に畳表を乗せて太い針で麻糸を縫いつける。縁（へり）布を乗せて仕上げてゆくが、その工程のひとつひとつが実に面白いのだ。道具も興味深く、太い針、十五センチはあるマチ針、鬼が持っているような大きな包丁。今では畳の部屋も少なくなり、又、ミシン縫いの畳になってしまったが、昭和の頃は全てが手作業だった。邪魔にならないように作業



伸子張り。布に伸子（先端に針のついた竹の細い棒）をつけてゆく

場の隅で見ている私を、職人やおじさんがヒヤカす。「おい初ぼう、そんなに面白いかい?」「うん、肘で糸を引っ張るのが一番面白い!」「そうかい、じゃあ畳屋になるかい?」「うん、見てるだけ」。アハハッと笑っている所へおばさんが「そろそろお茶にしないかい」と作業場に来る。「ねえ、おばさん、おじさんはどうして背中にお絵描きしてるの?」。皆がゲラゲラ笑うのだが、私はずっと気になってきた。当時は職人さんの中には背中に和彫りの入れ墨を彫っている人がけっこう居た。作業で着ているドンブリの奥から、おかめとひよっとこのお面が見える。「あれかい、おじさんが若い頃に粋がってサ、消えない絵の具でお絵描きしたんだよ」「ふーん」「おい初ぼう、その絵の具で描くと一生残って消えないのさ。:、何気ない会話だが、子供の私は、そんな不思議な絵の具があるんだなあと思っていた。

もうひとり背中にお絵描きしているおじさんがいた。ちょっと離れた所にある染め物屋のおじさんは鯉の滝登りが彫ってあった。祖父の釣友達で、おばさんは祖母と同級生だ。祖父と一緒に染め物屋に行くと、やっぱりドンブリ掛けのおじさんが仕事をしている。おじさんの背中に大きな鯉が跳ねている。「やっぱり消えない絵の具なんだ:」。でも、とっても奇麗な鯉だった。おじさんは祖父と話しながらも手を休めない。広い庭に一反の布地を伸ばして、伸子（しんし）張りの伸子をチャツチャツと付けてゆく。布が弛まないようにする作業だが、これが又見えていて本当に面白い。「コウちゃん、さすがだねエ、いい腕だ!」「クラちゃんだってそうだよ。お互い腕が頼りの仕事さあ」。伸子を張り終えると、水で濡らした刷毛で布をシャツシャツとこすってゆく。どうして手仕事ってこんなに面白いんだろう。私は染め物屋のおじさんの無駄のない動きが大好きだった。おじさんが動くときも動く。

「さあ、一服するか:」「コウちゃん、鮎友会の忘年会、今年はK料亭でやるからさ、来るんだろ?」「ああ、来年の放流の打ち合わせもあるしな:」。祖父とおじさんは本当に仲が良かった。祖父はおっとりしていたが、染め物屋のおじさんはシャキシャキしている。それでも気が合う。まるで落語の“長短”のような二人だった。「おじさんも消えない絵の具でお絵描きしたの?」「アツハツハツハ、はっ



金物屋の巨大なお鍋のオブジェ



おもちゃ屋のくじ引きの様子

「ちゃんはいまい事言うなあ」「畳屋のおじさんもそうだって!」「そうか、キンちゃんもだなあ…。お互い若気の至りだよ」「はつえも変な所に気がついてサ、悪いなコウちゃん」「はっちゃんも気がつく子だもんなあ」。こんな具合で畳屋、染め物屋、二人とも楽しく優しいおじさんだった。

近くに住むせつちゃんのおじいさんは、祖父よりも少し歳上で、メガネを掛けていつも英語の本を読んだり英文で日記を書いたりするインテリだった。私はこのおじいさんが大好きだった。「はつえちゃんも本が好

きなんだってネ。いいことだよ。本を読んで別の世界を知ったり歴史を知ったりできるものネ」「おじいさんは英語が好きなんだ。本も日記も英語だしネ」「そうだよ。第一英文の日記だと他人が読んでも分かんない人がほとんど、悪口だって書いてちょう」「ああそうか、私も英語の勉強しよう!」「そうだ、勉強は大切だ」。せつちゃんのおじいさんは東大出で、若い頃は政府の仕事をしていたらしい。戦後は少しの間基地の通訳もしていた。祖父の友人の松永先生の事もよく知っていて、「いろいろな人と会って話

を聴くことも大切だよ。本も話もいつか役立つ、みんな勉強さ」「うん頑張る!」「その意気!」。せつちゃんのおじいさんの背筋の伸びた読書姿を今も思い出す。

家具屋と寿司屋のおじいさんは、よく二人で家にやって来た。私が子供の頃、講(こう)と行って寺や神社の参拝団体旅行が町中で流行っていた。二人は別々の講元で、毎年行く講の参拝旅行の会費の積み立て金を集めに来る。「多賀講」は多賀神社、「成田講」は成田山新勝寺、まだまだ他に「お伊勢講」、川崎大師の「大師講」

などで、それぞれ月掛けをして毎年寺や神社に参拝し、その帰りに温泉に寄ってくる。寺、社が主か温泉が主か、もちろん寺社参拝が主という事になつてはいるが、後の温泉でドンチャン騒ぎをし、楽しくストレス解消して帰ってくる。

う、二人ともお店から来るんじゃないよ、裏口でしょ集金は」「だって店のほうがおネエちゃん達がいるからさあ…」「やだー、おじさん達ったらサ」「ほらほら、この黄色い声、ウチのバアさんとは異つていいネー」「ハイ、裏口!」。祖母がピシヤリと言うとすぐと裏口に行く。茶の間で集金した後、お茶を飲んだりおしゃべりしたりで帰る様子が無い。○○さん家(ち)のお嫁さんが強いとか、△さん家のジイさんが近頃ボケ始めて大変だとか、近所廻りをしているの

で、様々な噂話に花を咲かせて帰つてゆく。二人とも若い夫婦が店番をしているので時間はたつぷりある。とんだご隠居さんだが、それでも憎めない面白いおじさん達だった。

この他にも紙芝居屋さん、ポンせんべい屋さん、刃物研ぎや盲目の按摩の金さんなどは、浪波節を唸りながらやって来る。数えたらきりが無いが、今思い出してもまるで落語に出て来るような人ばかりだった。

昭和の町には面白いおじさんがそこら中に居て、活気のある風景を作っていた。ある意味、私はこの様な人達に育てられたのかなあとつくづく思うのである。

「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋

第三部 生活に身近な項目を見る

(※項目はランダムです)

五月二十八日 両国川開き

享保十七(一七三二)年は、気候不順により作物の生育不良、大規模な虫害が発生し、西日本は大凶作となり「享保の大飢饉」が起きた。また、



疫病も流行し多くの死者が出ている。

時の將軍徳川吉宗が、その死者供養と災厄除去を祈禱し、享保十八年五月二十八日に水神祭を催し、両国周辺

の料理屋が花火を打ち上げたことが「両国川開き」の由来とされている。

隅田川は川開きが済むと夏の期間3ヶ月は納涼が許されていた。そして、両国は納涼の名所となり、川開

きの花火は大勢で賑わった。明治になると、新暦が採用され、川開きは7月上旬から8月上旬にかけて行な

われるようになり、のち昭和五十三(一九七八)年から「隅田川花火大会」に改められ、今日に続いている。

四月一日 衣替え

季節に合わせて、衣服を着がえる習慣をいう。「衣替え」「衣更」とも書く。平安時代以降、まず宮中で定着した。旧暦四月一日と十月一日を更衣の日とし、四月一日になると冬装束から夏装束に替え、十月一日になると再び冬装束に替えた。当時は四季に応じた衣装はまだなく、下着

などで調節したといわれる。

江戸時代になると幕府が、四月一日から拾(あわせ)小袖、五月五日からは一重帷子麻布(ひとえかたびらあぎぶ)、九月一日から拾小袖、九月九日から綿入小袖などと定めた。

戦前は、軍人や警察官も学生と一緒に衣替えをした。現在でも六月一日になると、中学・高校などでは夏服に衣替えをしているところが多い。今日、冷暖房を完備した所が増え、この行事もやがて廃れていくかも知れない。

四月八日 灌仏会(花祭り)

釈迦の誕生を祝して、寺院で行なわれる法会。灌仏会は、インドから中国を経由して日本へと伝来した。かつてインドでは、この日を聖日とし、釈迦の童形をかざって樂を奏し、香華を焚き、香水で沐浴灌洗する灌仏の式が行なわれていた。中国でも古来盛んに行なわれてきた。日本では仁明天皇の時代(八三三〜八五〇)という説がある。

灌仏会を花祭りというようになったのは、明治三十四年からである。戦前は稚児行列・舞踊・礼賛の歌など、子供中心の祭礼であった。

寺院で行なわれる灌仏会では、花で飾った御堂(花御堂)をつくり、

誕生仏を浴仏盆と呼ぶ水盤に安置し、竹の柄杓で甘茶を注いでお参りするのである。

四月十五日 蛙払い(沖繩)

別の呼び名「アプシバレー」、沖繩の人々にも聞き慣れない旧暦の行事である。けれども、沖繩の南部、北部や離島地域ではまだ見受けられる。これは、つまり虫払い…、害虫駆除の意味合いである。

農業が盛んだった昔、草が茂るこの時期に草を刈り、害虫を駆除すると共に神々さまへお願いして、害虫による被害から守られるよう祈願した。

四月十六日 夏入り

日本では「梅雨入り」は発表しているが、「夏入り」は発表していない。中国では、夏に入ったことを示す「夏入り」を発表している。それは、その年の気温時系列データのうち、気温が最初に二十二度を上回った日を「夏入り」の日とする。

(著者は広島市安佐地区の郷土史研究会「安佐通史会」会長。旧暦の啓蒙や「旧暦カレンダー」の普及に尽力している。)

ヨーロッパ23日間「卒業旅行」(二)

マック☆ヤマザキ

1990年2月17日(土) 早朝、ロンドン到着。卒業旅行2日目だ。日本との時差、9時間遅れ。ホテルにチェック・インするまでの約5時間を「観光」と「ショッピング」に充てた。

学生たちに、大切な情報を与える。交通に関しては「車は左、人は右」と日本と全く同じなので、イギリスでは交差点を渡るときなど、「右見て、左見てゴー(渡る)」。タクシーも、

バスも右ハンドル、特に、タクシーのドアは日本のように自動でないので、自分で開ける、それも観音開きのなだ。

極寒、強風のテムズ川をまたぐ橋の上で「お上りさん」よろしく学生たち個々の記念撮影。ビッグベン(大時鐘)を背景にしたスナップ写真を手早く撮る。あまりの速さに学生たちは「大丈夫ですか」と疑うのだが、こんな感じで今までに何人もお客様

を撮ってきたのだ。

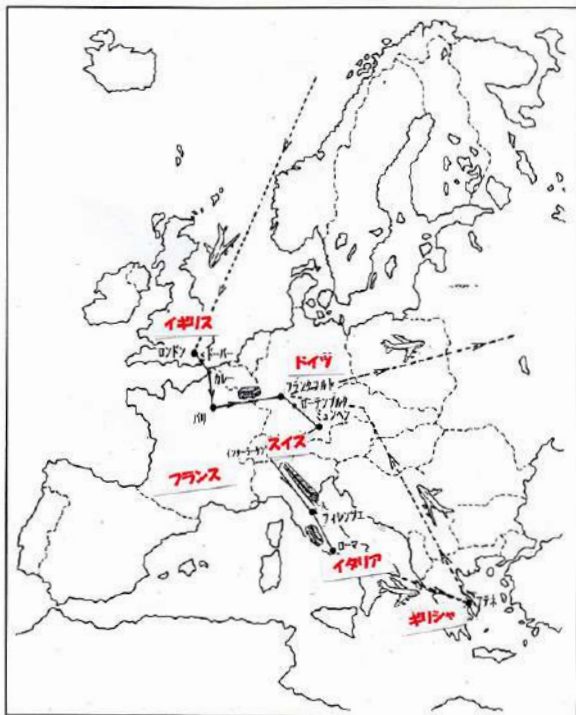
次に、学生たちの希望で免税店に入る。暖かい! パーバリーやアスクュータムのコートを学生たちは競うように買い込み、その場で着込んだ。国内消費税が免税になるので、日本で買うより格安であることを研究済みだったのだろう。これらのブランド二つはイギリス発祥の高級ファッションブランドである。第二次世界大戦中、冬季ヨーロッパ戦線で王立海軍や王立の将兵が同社のコートを着て戦っていたことで知られている。「アクア」は水、「スキュータム」は盾で2語を組み合わせた造語、特に防水性に優れていたとの評判を学生達から教えてもらった。学生たちは、マフラー、手袋、帽子なども購入、寒さ対策の準備に感心した。

メロデーが浮かんできた。朝食は機内でとったため、みんな空腹だったろう。まともな昼食をと、ロンドン名物の「フィッシュ&チップス」(イギリスの国民食と言われ、衣をつけて揚げた魚とフライドポテトの組み合わせ)にした。日本で食べ慣れているマクドナルドと似ているので、フライドポテトがついているので安心だ。

昼食後、ロンドン塔を訪問。ロンドンを外敵から護り、市民の暴動に備えたイギリス王室の緊急の避難場所でもある。同時に政治犯の幽閉場所や監獄として、時には処刑もされたという物騒なところだ。首のないアン・ブリーン(ヘンリー8世の2番目の王妃。ヘンリー8世が離婚したために姦通の疑いをかけて斬首刑)が徘徊する等々、恐ろしいエピソードがあるようだ。

午後3時ごろホテルにチェック・イン。ロビーに自分たちのスーツケースを並べ、破損の有無を確認してもらった。夕食は各自でとるように伝えておいたが心配だ。部屋をノックする音! 野菜炒めを作ったのでと差し入れ、短大で受け持ちの女子学生3人に感謝!

「卒業旅行」ルート・訪問国(滞在都市・日数)
イギリス(ロンドン・3日間)、フランス(パリ・3日間)
ドイツ(フランクフルト、ハイデルベルク、ローテンブルク、
ミュンヘン・5日間)
スイス(インターラーケン・4日間)
イタリア(フィレンツェ、ローマ・6日間)
ギリシャ(アテネ・4日間)



バックingham宮殿の衛兵の交代式を見る。赤い服、黒いズボンと見ていたが冬場はグレーの服であった。多くの観光客が待ち構える中、重厚なグラスバンドの音色が響いた。シャッター・ポイントを求めて人が動く。黒い大きな帽子はクマの毛製だとガイドが説明してくれた。思わず「ヤットコ、ヤットコ繰り出した、おもちゃの兵隊、ラッタッター」の

どろくろ俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

山眠る猿と猪野に放ち

近藤 昌平

秋風や匂友と巡りし古墳の丘

富久光

いつまでも日本列島秋暑し

片岡 正人

長き夜何度も起きて月眺む

隆愚

鈴鳴らし下校の子達吾亦紅

大槇 三代子

満月に線路工事の人の影

寺内 龍二

旧友待つや雲上人となりし秋

赤川 冬人

秋草のとりどりに競ひ咲ける花

松岡 初枝

ひそやかなれど吾亦紅の色

る」の候といひます。大地が始めて凍る時期という事です。

候のことば

隆愚

「地始凍」と「小春日和」

いよいよ冬がやってきます。十一月七日は立冬です。七十二候では立冬の次候は十一月十二日から十一月十六日で「地始凍（ちはじめてこお

る」の候といひます。大地が始めて凍る時期という事です。大地が始める「霜柱」です。とはいえ、舗装された道路が多くなって、霜柱を見る機会も少なくなりました。霜柱が立つ日は、お天気が良くなるものです。陽がさしてきて霜柱が解ける事を「霜崩れ」といいます。ぬ

かるんだ道に悩まされる事もなくなったと言えますが、霜柱を踏んで歩けなくなったのは少し寂しい感じ

です。今の頃になると、日中はまるで春を思わせる陽気が多くなります。そこから、旧暦の十月の事を「小春」と呼ぶようになりました。そしてこの時期の穏やかな天気のことを「小春日和」といいます。厳しい冬に向かう前のひと時です。小さな春は太陽からのささやかな贈り物かもしれ

せん。霜柱深き嘆きの声に溶け

野見山朱鳥（のみやまあすか）

「テレビの画質」 赤川 仁洋

十月の連休中に、大学時代の仲間と旅行に出かけてテニスをするのが毎年の恒例だ。定休日や二月の在庫整理期間を除いては、年末年始も関係なく店を開けているが、この期間だけは臨時休業している。

持病の腰痛悪化でテニスは無理と自覚したが、五人で一部屋のパック料金で予約しているので、ドタキャンして迷惑はかけられないと参加。テニスは早々に切り上げて温泉に入ってから、外房の海が見渡せる広

い部屋でひとりで読書。持参した本の一冊が関川夏央の「戦中派天才老人山田風太郎」、最強の、いや最狂の作家である山田風太郎へのインタビューが破天荒で面白い。しかし、歳のせい何か何事も持続時間が短くなった。

気分転換にテレビを点けたら、昔のサスペンスドラマを放映していた。桃井かおり主演の「女検事・霞夕子」、桃井かおりも若くてきれいだが、犯人役の星百合子が四十代の女盛りで美しい。しかし、顔のアップで化粧の跡がくつきり。自宅でテレビを観なくなって久しいが、画質の向上に驚いた。過ぎたるは猶、及ばざるが如し！



どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

「庄原を想う会」主催の交流会

「気軽に庄原について話し、仲間の輪を広げよう」

日時：12月14日(土)13:30～15:30

テーマ：「要害桜を中心とした小奴可
の地域活性化について」

講師：名越峯壽氏

(小奴可自治振興センター会長)

場所：交通交流施設1 (JR庄原駅隣接)

参加費：500円

(学生200円、お茶菓子代込み)

申込み&問合せ：080-3631-9125 (やない)



「ぐんぐん伸びよう会」

(教室：庄原市川西町241 連絡先：080-3631-9125 やないたえこ)

当教室の目標

(黒板のない教室)

- ・当教室の教育の目的は、自分で学んでいける人間を育てることです。
- ・基礎力をしっかりと身に付けて、自学自習力で学年を超えて学んでいきましょう。
- ・乳幼児～小学生を対象に、個人別、能力別に「**ちよどの学習**」をしてもらいます。
- ・「**ちよどの学習**」とは、生徒の「**作業力**」「**理解力**」「**集中力**」に合わせた学習です。

無料体験学習受付中!! お気軽に問い合わせてくださいね。対象者:0歳～小学6年生



「旧暦カレンダー」(販売価格:1,650円)

- ・日本の自然に根差した暦(こよみ)です。
- ・太陽暦でも太陰暦でもない、「太陰太陽暦」です。
- ・新暦(太陽暦)も併記しているので便利です。
- ・季節の行事や呼び名の意味が、より深く理解できます。
- ・自然災害の予測ができます。

どら書房にて令和7年度版 予約受付中!

(12月初旬入荷予定)

※本誌特別連載の古川行洋氏推奨。



編集後記

◇11月号をお届けします。今回は寄稿が多く、16ページの増大号。図らずも、倉田百三特集のような感じになりました。現代御伽草子はお休みです。

◇腰痛悪化で長距離移動が辛く、大学仲間との旅行も今回が最後だと宣言。これで上京する理由がなくなりましたので、10月に臨時休業することもなく、古本屋業に専念です(苦笑)。

◇土鈴作家として活躍し、本誌に俳句(富久光)を寄稿していただいた原博己さんが、10月3日に永眠された。近藤昌平さんに次ぐ句友の喪失。待つていてください。三人で彼岸を吟行しましょう。◇急に寒くなり、秋はどこ?夏が長すぎです。

発行：どら書房

〒727-0012

庄原市中本町 2-1-10

☎090(9913)3052(赤川)

e-mail:touzin@nifty.com

誌面デザイン:ROUTE183

協賛:九日市愛好会

第278回

くんちいち

ひょうばら九日市

◇ イベント情報 ◇

九日市ライブ⑤★今回は出演は5組です。芸術の秋、バンドや独唱、ウクレレ演奏など、多彩で多才な音楽をお楽しみください。

★出演者募集中！参加申込フォームが comeme 商会 公式 Instagram の DM から申込みを。

参加申込フォーム：<https://forms.gle/TcDob1YS8GdSn766> Instagram：<https://www.instagram.com/comemeshokai/>



11月9日(土)

9:00~13:00

九日市ライブ⑤ (まちなか広場)

- ・MATSUMOTO' S from えぶるん♪ (9:30~)
- ・坂本まさひろ (10:00~)
- ・ポレポレ♪ (10:30~)
- ・KKバンド (11:00~)
- ・はっぴい★カワ (11:30~)

TOPICS(開催場所は裏面の地図参照)

★市民ギャラリー「アート多愛夢」
11月8日(金)~10日(日) 10時~15時
「『風の色紀行』写真展」

★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き

★カフェクラウド タピオカドリンク 100円引き
九日市特製ピタサンド 600円

★利き酒・試飲イベント「さけくらべ」(庄原酒販)
ガレージセール「comeme 市場」同時開催(場所：旧松本額縁店)

★アンドカフェ(比婆医院隣接)、2種類のスムージーが100円引き。

★どら書房、休憩室(漫画ルーム)あります！ 無料です。

★あなたも自分のお店を出してみませんか？(出店者募集中！)

*出店申込みは、【毎月20日締切】 コンパネ1枚スペース1,200円~
九日市愛好会事務局 TEL/FAX(0824)72-8285
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10(楽笑座内)

【ホームページ】
<http://www.kunchi-ichi.jp>

